

**18**

18歳未満閲覧購入不可  
FOR ADULT ONLY

scatfree.net  
HEXIVISION



幻 想 郷

ヘビーブーム

★好評ファンタスティカAPPEND★

あなたを欲しがつてしまつたら  
もしも妊婦になつた聖白蓮がすごごく

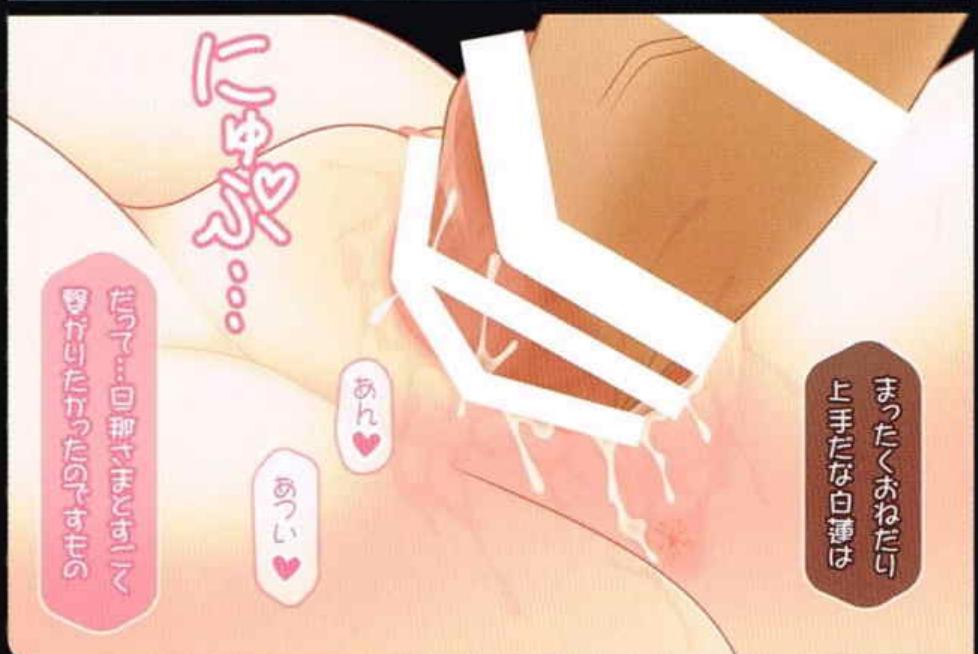


★妊婦ファンタスティカAPPEND★



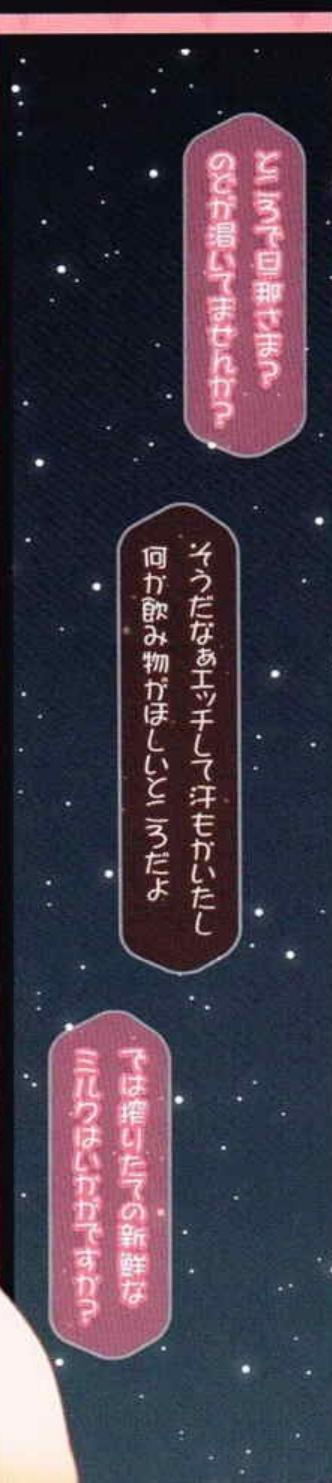
日々の幸せな生活を送っていたある日のいと











このあと何度も求められ愛の  
飲みは明け方まで続きました

ラ  
ブ  
ラ  
ブ  
な  
生  
活  
を  
続  
け  
て  
い  
た  
ら  
：

も  
し  
も  
彼  
女  
が  
妊  
婦  
に  
な  
つ  
て  
も  
変  
ら  
ず



★狂媛ファンタスティカAPPEND★

ん…?…どうした?

お腹の子に  
ヤキモチやいちやつた  
な!?

いや…もうすぐ  
慧音先生が僕だけの  
ものじやなくなるんだなあつて

じーつと見て…

違うのか?

全く…仕方のない  
パパだな  
ば…パパ!!?

いや…  
そうだね…  
慧音

慧音先生は

俺の嫁

作:森ぐる太





旦那様早く帰つて  
こないですかねえ♪

はくい

あ

コンコン

ドキ。

ドキ。

文さんと  
いつしょ

作  
ざりんどう

おかえり  
なさいませー  
ア・ナ・タ♪

ニバッ

ドタ

パン

パン





# レティさんとおつきなおなか

作・ラモトツ





わる

ニユルニユルニユルで  
レティイのナカ  
きもちいいよ

わふわ

わん

ああつ

おつきい一つ  
やつぱり一つ

わふわ

おつぱい…  
はつてきてるね

わあ

あつ  
ダメよ

たぶ

あら

わふわ

はあつ  
でちゃつてる

おつぱい…  
でちやんつ

わふわ

たみ  
たみ

わふわ

わふわ

わふわ  
わふわ

気持ち…いいつ

おつぱい絞られながら  
優しく突かれるの  
きもちいいつ

わふわ

わふわ

わふわ

わら

レティつ  
射精すよつ!!

んあつ  
あなたのミルク:  
たくさん出てる

あつたかいの  
いっぱい!

おやすみなさい  
おつきな赤ちゃん

もう一つのあつては  
おえつぱい吸つては  
ねんねなんんて  
もう二人目が  
できちゃつたわね

んちゅつ



地下に閉じ込められていた  
悪魔の妹と恋に落ちて…

一生幸せにすると誓い  
結婚をしました。

## ハラマセ ワランベリー

作：風居ユキ

そして…

ねえお兄さま！  
お腹の子も  
大きくなつたよ

ん？どうしたの？  
お兄さま：お腹  
触つてみる…？

フランね…今すつごく  
幸せだよ…♥  
もつともつとフランを  
幸せにしてくれる…？

んつ...♡みるく絞り  
上手う...♡

フラン...?  
おっぱい揉んだだけで  
どうどうになつてるよ?  
そんなにおっぱいよかつた?

うん...  
このまま来て...  
♡

マアシフお兄様つ...♡ううん...  
フランのつ...♡旦那様つ...  
しゅきつ...♡愛してますつ...  
あなたのお子供つ...♡産むからあつ...  
ママになるからねつ...♡  
マアシフお兄様つ...♡ううん...  
フランのつ...♡旦那様つ...  
しゅきつ...♡愛してますつ...  
あなたのお子供つ...♡産むからあつ...  
ママになるからねつ...♡

フランつ...♡好きだつ...  
愛してゐ...つ...  
幸せになろうね...つ...  
俺の子供を産むんだよ...  
♡



フランね？お兄様に会えてよかつた…  
好きな人と結ばれて、  
好きな人ととの子供を授かって…  
とても幸せなの…  
とつとつと一绪にいようね…  
私の、愛しい旦那様…

フラン…  
これからもいっぱい  
作りしようねつ…

おわり！

# 聖白蓮との妊娠ラブライフ

文：きなこ 絵：CPU

妊娠しているのでどうしようもないのだけど、身体の前を洗う時は乳首やお腹が背中にあたってしまう。乳腺が張っている状態なので少し振れただけでも感じてしまう。「んっ…痒いところはありますか？」「

妊娠してからも住職として命運寺でその務めを続けていますが、寺のみんなの計らいでいつも旦が傾く前には帰宅させてくれる。帰宅したあと、夕食の準備を済ませ、一息ついていると旦那さんが帰ってきた。

「おかえりなさい。今日も一日お疲れ様でした。」

「一日頑張って働いてきてくださった旦那さんに労いの言葉をかける。すると旦那さんは玄関で履物を脱ぎ私に駆け寄ってきて大きくなつたお腹に手を添える。だいぶ大きくなつたねと旦那さんが優しく私のお腹をさすってくれる。

「もうすぐヶ月目ですよ、順調に育つてるんですからね」

「ちなみにもう、お夕食の準備は出来ていますよ。それとも先にお風呂になさいます？」

「旦那さまは腹ペコだと訴えてきたので早速夕食にすることに。」

「あまりガツガツ食べるヒノドにつまつちやいますよ」

「そう言いつつも、私の手料理をおいしそうに食べてください」と私は、旦那さまを見て嬉しくなる。

「あ、お風呂、沸いてますよ」

夕食も終わり一息ついたあとは、旦那さんがお風呂に向かった。それに気付いた私は洗いものを手早く済ませたあとすぐに浴室へ向かう。そして脱衣所にはいると着ていた服をすべて脱いで裸になり、浴室に入る。

「今日もお勤めありがとうございます：がんばつてくださいた旦那さまのために今日もお背中お流しますね」

すると旦那さんが私の方を見て照れるように微笑んでくれた。

毎日の旦那さまのお勤めを労うため、旦那さまの身体を流してあげる。誰が言い出した訳でもなく結婚前から行っていた習慣だけ今でもこゝやつて止める事なく続いている。

毎日一緒にお風呂に入つていてるけど旦那さまに裸を見られるのはやっぱり恥ずかしい。妊娠7ヶ月になり母乳を出すためにさらに大きくなつたおっぱいと、ぽつこりしたお腹で恥ずかしさも割り増しなんだけど、旦那さんはそんな私すら愛おしいと言つてくださる。腰掛けに座つた大きな背中にお湯をかけ洗い流し、泡立たせたスポンジで全身をくまなくこすつていく。

「はい、じゃあ次は腋の下洗いますねえ、パンザイしてください」

最初は恥ずかしがつてた旦那さまだけど、今では私の言う通りにして体を預けてくれる。

「んっ…あんっ…」

そして裸でスキンシップをしていると、いつものように旦那さんに異変が見られる。

「おちんぽ勃起させちゃつて…妊婦さん相手にこんなに興奮するなんてイケナイ旦那さま」泡だつたスポンジをそつと股間に回し、おっぱいもぐにゅうつと押し当てる。

旦那さまはおちんぽをどさりに硬くさせながら抵抗するかのように咳く。

「え？私の身体がすごくいやらしい…から？」

どうやら私のおきなお腹に興奮してこうなつたようだ。

「まさか妊婦の私に欲情するなんて…旦那さまの性欲は本当に底知れませんね」

ムクムクといきり立つたおちんぽをスポンジでギュッと包み優しくこすつしていく。

スponジの感触がこそばゆいのか、身をくねらせる旦那さま。それでも構わずシユツシユツとこり合わせていると観念したのか旦那さまがお願いをしてきた。

「手でシテほしいんですか？もう仕方のない人ですね」

「じゃあ後ろからじやちゃんど洗えませんね、はい、前を向いてくださいね」

くるりと旦那さまを前を向かせ、泡だつた私の手では包み込めないほど大きなおちんぽを指先で優しく刺激する。最初はサオの部分を、そしてだんだんとカリ首を。両手で優しく包み愛おしく上下に擦る。じゅぶじゅぶとした泡だつた音をたててている。

「気持ちいいですか？ふふっ…ピクピクつてしますよ」

旦那さまの身体がビクッビクッと股間を起点にして震え出す。旦那さまの気持ちのいいポイントは私は十分知り尽くしている。

旦那さまのおちんぽの灼けつくような体温が手から伝わつてくるのを感じながら何度も丁寧に睾丸の裏からスジの方まで洗う。旦那さまの表情はもうお風呂ではなく完全に快樂に身を任せたオスの顔をしている。

「しゅっしゅっしゅっ…ぐぢゅっぐぢゅっぐぢゅっ…」

更に硬さを増していくおちんぽからは石鹼の泡とは明らかに違う粘質の液体が分泌され

てきた所で私は二コツと笑顔で旦那さまに次の段階へ進む事を告げる。

「もう…せつから洗つておちんぽからどんどんあおつゆがあふれてきますよ…ほら、手がこんなにネチョネチョになっちゃいましたよ」

ぐはつ

ガチガチになつたおちんぽから手を離すと亀頭から中指に一筋の糸が引く。

これだけで十分達してしまった。おちんぽを唇に手を当てながら告げる。

「次はお口で、気持ち良くしてあげます…ね」

そう言って旦那さまを椅子に座らせる。私もお腹に負担にならないようそっと屈み、おちんぽにそつと唇を伸ばしていく。

「んつ…あ…んむつ」

「ひつぱいに開け舌を絡ませながら少しだけ張っていく。

「ひちやつ…じゅる…ぐふつ…」

舌先を絡ませ口の中に含んだ亀頭をレロレロと丹念に舐め回す。

「じゅるつ…大きい…」おちんぽで何度も愛してくれたのですよね…んぐつ…じゅる」

旦那さまを見上げながら私は口をすぼませつつおちんぽを吸い上げる。

旦那さまは気持ちよさからビクンビクンと腰を震わせ、感じている事がわかる。

「ふふふ…こうされるのが好きなんですよねえ、ゼスン、わかつてんんですけどからね」

裏筋をべろべると舌先で舐めあげる。裏筋の真ん中あたりが旦那さまの弱点なのだ。

続けて亀頭、鈴口を唇で包みながら口の中で更に舌先で舐め回すと旦那さまから快楽を我慢する声が聞こえてくる。

「ふふつ…我慢しなくて…あんむつ…んつ…いいんですよ…じゅるるる」

おちんぽに口づけをし亀頭から滲み出てきた粘液をすすりながら旦那さまに微笑みながら言葉をかける。旦那さまの射精が近い事は感覚でどうわかつてきている。

「やあつ…」

おちんぽから口を離すとニチャつと音がし粘液の糸が唇とおちんぽをつたう。私の唾液と混ざり合ってベトベトになつたおちんぽを音を立てながら手でこすりたてる。

旦那さまのおちんぽが小刻みに震えだしてきた、いよいよ射精が近くなつてきた。  
すると旦那さまから珍しくお願ひがあると提案してきた。口に出させて欲しいらしい。

「ふふついいですよ〜私のお口の中でいっぱい出してくださいね」

再び口を開けて、ますます大きくなつた旦那さまのおちんぽを受け入れる。

「ぐはつじゅずすすすするるるる」

根本まで咥え込み粘液を啜りながら喉奥まで旦那さまのおちんぽを受け入れる。

私の口の中が焼け付くように舌を這わせる。その度にビクツビクツとおちんぽが反

心し私の口の中で暴れようとしてくる。

「んぐる…るうですか？きむひいですかあ？」

おちんぽを咥えたままで嘰る事で、口の中の粘膜が蠢くようにうねり、より快感も増す。

旦那さまもぐすぐつたいような気持ちいいような複雑な表情をしながら快感に身を任せて

いる。気持ち良くなつてくれているのかと思うと私も嬉しくなつてくる。

「じゅぱつ…じゅふつじゅふつじゅふ…んつふつんはあつ」

唇をすばませながら、じゅぱつじゅふつじゅふ…んつふつ…んはあつ

唇をすばませながら、じゅぱつじゅふつじゅふ…んつふつ…んはあつ

「じゅつぶじゅつぶじゅつぶじゅつぶ…ぐぱつ」

いきなりだつたのでちょっとびっくりした私はえづいてしまつた。

それに驚いた旦那さまが腰を止め、私を心配し始めごめんねと声をかけてくる。

「えふつ…けほつ…大丈夫です、ちょっとびっくりしただけですから…あむつ。」

私は笑顔で旦那さまのおちんぽを再び頬張る。すると旦那さまがピクピクツと震えだす。

「ふして…つ…わらひのおくちにいづぱいぱい出してくらさい！」

旦那さまの腰の動きがさらに加速する。もう限界が近いことを告げているようだ。

「じゅすつじゅぱつじゅぱつじゅぱつ！」

旦那さまがグツと腰を押しこみ私の喉の最奥までおちんぽをねじ込み精液を吐き出した。

「ぐびゅるるるるりー…びゅー…ぐびゅるりー…びゅるるるるるるりー！」

私の喉奥を妊娠させようと大量の精液が流し込まれてくる。射精の勢いは留まる事なく、

思わず吐き出しそうになるがぐつとこらえて飲み込んだ。

「んぐつ…けふつ…じゅずるるるりー…」

喉を鳴らして精液をすべて飲み干した後、おちんぽを優しく唇と舌で舐めとつていいく。

亀頭の先に残った精液を唇で吸い出し、丹念におちんぽを舌を這わせて掃除していく。

カリの部分を舐めどる時に旦那さまのおちんぽが反応してピクンッと動く。かわいい。

「じゅるるる…んはあつ…ちゅ…ふつ…はい、綺麗になりましたよ。」

唇の端から飲みそこねた精液を垂らしつつ私は旦那さまに微笑む。

「旦那さまつたら、お仕事で疲れてるはずなのにおちんぽは元気でしたねつて…あら？」

先ほどあっただけ射精したと言うのに旦那さまのおちんぽは未だに剛直を保つていて。

「ふふふ…まだモノ足りないんですね、本当に我慢できないおちんぽさんですね」

息を荒らげ今にも飛びかかるん勢いの旦那さま。腕を広げ私は優しく誘う。

「続き…いたしますか？」

すると旦那さまが一心不乱に私の大きくなつたおっぱいにむしゃぶりつく。

「んつ…はあつ…そつそんなに…吸つたら赤ちゃんの分がなくなつちやいますよお…」

旦那さまが赤ちゃんになつたかのように吸い付いてくる。両手でおっぱいを包み込み、

優しく愛撫しながら母乳を舌先ですくい上げるかのように乳首を舐め取っていく。

「んふつ…ひゃあん！」

母乳と唾液でベトベトになつたおっぱいを旦那さまが優しく歯で甘噛みをする。本当に

小さな力ではあつたのだけど、乳腺が張つた上体のおっぱいが敏感になつてしまい通常よりも数倍の感覚の波が乳首に集中する。

旦那さまが私の様子を見て力加減を抑えて口の中で蕩ける生菓子を転がすかのように優しく乳首をしげいてくる。そして私の反応にあわせて旦那さまは唇をすばめて乳首を吸い

出そうとしてくる。

「ちゅぱつ…ちゅるつ」

今度は再び歯で乳首を優しく甘噛みしてくる。そして再び、今度は私にも聞こえるよう

に大きな音で乳首に吸い付く。

「じゅるるるるるるるるつ」

「はあんー…旦那さまつ…たつダメですつ…それ以上つ…んつ吸つたら…でつ出ちやう…！」

旦那さまの激しい愛撫に耐え切れず、メスのスイッチが入つてしまつ。

「んんつ…はあつ…ん…旦那さまあ…もうこれ以上は…つ」

おっぱいだけを責められ続けて頭がどうにかなつてしまいそつ。

すると旦那さまの片手が私の背中から離れ、下の秘部、おまんこに手が伸びていく…。

まだ桃色の割れ目から愛液が溢れ出てくる。

「たつ駄目えつ…今…触られたら…ひやつ…ひうううううんつ…」

旦那さまが手を伸ばし、おまんこに触れた瞬間くちゅつと言つ音を立てて指が沈みこみ、

完全に油断していた私は思わず快感に身体をピクンと震わせ軽く達してしまつ。

さらに追い打ちをかけるように旦那さまが左右のおっぱいを片手でコリコリと刺激しな

がらもう片方にははむつと食い付き歯で刺激を与える。

「あんつ…私…いつも…んつ…んんんんつ…」

相次ぐ快感の波が全身を駆け巡り絶頂へと導く。

「びゅるつ…びゅー…ぶしやあああああああああつ」

「あつあつあつ…赤ちゃんの分なのに…お乳出るの止まらないのお…」

おっぱいの乳腺から白濁した液体が噴出する。

「だめえつ…旦那さま見ないでつ…くださつ…ひつんんんんんんつ…」

イクと同時に私のおまんこは潮を吹き、同時に勢いよく母乳を噴き出してしまった。

「はあん…あふう…んつ」

快楽の波が落ち着いた頃には風呂場を、そして旦那さまと私を母乳まみれにしていた。すると旦那さまが優しく微笑みながら私にキスをしてくださる。

「んつ…ちゅつ…んちゅつ…ちゅつちゅつ」

甘い刺激と快感が全身を駆け巡り、愛されてる実感、満たされている幸福感で意識が蕩けそうになる。

そうしているうちに旦那さまのおちんぽは一度射精した事など嘘だつたかのようにすっかり硬さを取り戻している。びくんびくんとはねるおちんぽを見ながら私は微笑む。

「旦那さまあ…そろそろ…いいですよね？」

旦那さまの前で膝立ちになり、糸を引きながらトロトロおまんこを指でくばあと開きひくつかせたサーモンピンクの淫肉を広げて見せる。

「もう我慢できないんです…今度は私の…下のお口で…おちんぽミルク…飲みたいの…」

目を潤ませ熱い吐息を吐きながら旦那さまに身体を預けると、旦那さまは浴槽に腰掛け優しく受け入れるように私を旦那さまの上に跨がらせてくれる。

向かいあって座るこの対面座位の姿勢はたくさん旦那さまの愛を感じられる。

旦那さまが私の腰に手を添えてくださつたといふや、私がおちんぽに手を添え、お腹の重みが負担にならないようにおまんこにあてそのままおちんぽとキスをさせる。

「んつ…それじゃ、入れちゃいますね…はあ…」

そのまま大きなお腹の重みに合わせて少しずつ腰をおろしていく。

「んつんつ…んんんつ…はあああ…」

おちんぽが柔らかなおまんこの肉壁に沈み込んでゆく。少しずつおまんこに旦那さまのおちんぽの形が刻まれていくのがわかる。

旦那さまのおちんぽは熱く蠢いて脈打ち、おまんこの中が火傷してしまったんじゃないかなと勘違いするほどジンジンと甘い刺激がおまんこから脳髄へと駆け巡つてくる。

「うつ…ふつ…んつ…」

おちんぽが根本まで入り、赤ちゃんの部屋の扉、子宮口を小突く。

「ふわつ…ああ…当たつて…旦那さまのおちんぽが私の奥まで当たつてるう…んつ」

奥までおちんぽを飲み込んだ快感で全身がビクンビクンと震える。すると、旦那さまの顔の目の前におっぱいがあるせいか、旦那さまが私のおっぱいにしゃぶりついてきた。

「くつちゅるるるるるる！」

先ほどの絶頂に加え、挿入の快感で全身が性感帯になつていて私はまたイッてしまつた。噴き出した母乳を今度は旦那さまがお口で吸い続けている。

「あつあつあつ…んいいついくうううううう…はつ…あつ…ああつ…あん…」

「わうつ…ズルいです…繋がつてている時にでおっぱいを吸われるの…弱いのに」

私はほっぺたを膨らませつつ旦那さまにスネた様子で抗議の態度をみせる。もちろん、本気で抗議している訳ではない。

「じゃあ今度は私が旦那さまにお返しをする番ですかね！」

そう言うと私は少し腰を浮かせ、おちんぽを半分ほど引きぬいた後、腰を一気に落とす。

「ぶちゅん！」

旦那さまが突然の快楽に驚きながらも私の体とお腹の赤ちゃんを心配して下さる。

「大丈夫ですよ、子宮内に魔法防壁で守つてますからね」

「にゅぢゅつじゅつぐぢゅつぢゅつ…」

腰を上下に動かし旦那さまのおちんぽをおまんこで擦り上げる。その度に肉壁がめくれ上がり、そしておちんぽがかき分けてトロトロのおまんこの奥まで沈み込んでゆく。

「んつ…どうですか…? 私のおまんこの中は気持ち…いいですか…?」

旦那さまが天を仰ぐように顔を上げ、気持ちよさそうな表情を見せててくれる。そんな顔を見せられると私のおまんこがきゅうっと収縮し、旦那さまのおちんぽをきつく締め付ける。

「ふふふ…私もすつ…」く気持ち良いですよ…旦那さま」

そう耳元で囁き、旦那さまの背中に両手を回し、優しく抱きしめキスをする。

「んちゅつ…ちゅつ…んつんつ…旦那さまのおちんぽ、どんどん大きくなつていつてますよ」

私が耳元で囁くと今度は旦那さまが私の耳元で囁いてくる。

「えつ…ええ、お腹の子はどんな弾幕も防ぐ超特別級の魔法防壁を…」

「どつちゅん！」

「んひい！」

突如旦那さまが腰を浮かせ、私のおまんこを突き上げてくる。

「だつ旦那さま…まつ…あんつ待つてくだ…んつんつああああつ！」

おっぱいがぶるんぶるんと激しく揺れ、旦那さまが私を突き上げる度に私の甘い声が漏れる。おまんこからはトロトロの愛液が泉のように溢れ出でてくる。

「にゅるん…じゅぶつじゅぶつじゅぶつじゅぶん！」

旦那さまのおちんぽが的確におまんこの中、子宮の入り口を突いてくる。

「んつんつんつ…おちんぽがつ…私の奥につ…はあ…ゴツゴツつて当たつてくるうつ！」

腰を動かしながら張り付くように抱き合いお互いの身体を貪りあう。



「あつーあんーあつあつ…旦那さまあ…旦那さまあ…！」

旦那さまのおちんぽが私のおまんこを突く度に愛液がいやらしく泡立ち、おまんこがきゅんきゅんっと締まり、おっぱいからは母乳がびゅるつびゅるつと飛び出でくる。

溢れ出る母乳に旦那さまが再びむしやぶりつく。

快楽に抗えず次第に子種を求めるように自分で腰を動かしてしまふ。

「ぬちゅつじゅぶつじゅぶつ」

おちんぽの先で赤ちゃんの部屋、子宮口を小突かれる度に息が荒くなり快感が昂っていく。「あんつ…旦那さまの震えてる…射精そうなんですね…んつ…いいですよ…私の中に…」

「旦那さまの熱い子種をいっぱいいびゅーつびゅーしてくださいいいい…！」

旦那さまの腰の動きが徐々に早くなつてくる。——射精が近い。

旦那さまが腰を引き、一瞬溜めた後に一気に私のおまんこを貫く。奥まで到達したおちんぽはおまんこの中で一瞬、震え……。

「どびゅつーびゅるるるるるるるー！」

「あうあうあう…ひあり…んつ…イクつ…イッちゃううううううー！」

絶頂と同時に旦那さまを抱きしめ、脚を旦那さまの腰に回しガツシリと固定する。快感で足の指先がピーンと反る。

「出でてるう…あつ…くうううん…旦那さまの…熱い子種が私の中にたくさん出でてるう…」

旦那さまの射精はまだ止まらない。私のおまんこ中で何度もうねり、おまんこの中を熱い精子で満たしていく。ピケンピケンと肢体を震わせお腹の中が満たされていく暖かさを感じながら余韻に浸る。

「あふつ…お腹の中いっぱいに広がって…すこ…氣持ちいいです…旦那さまあ…」

繋がつたまま温もりを感じながらぎゅっと抱きしめる。そしてもう一度キスをした。

「大好きです、旦那さま…」

「でもこんなエッチな事するのは…旦那さまだけなんですから、ね」

そのあと精液や愛液、それに母乳まみれになつたお風呂をきれいにしてから、お風呂からあがつて、そろそろ就寝時間。旦那さまと一緒にお布団に入ると、旦那さまは私のお腹をさすりながら私にやさしくしてくれる。

「ねえ旦那さま？赤ちゃんの名前ってそろそろ考えてたりしますか？」

私がそう言うと旦那さまは頷いた。

「えつ…もう3人目まで考えているんですか？もうせつかちさんですね旦那さまは」「でも…うれしい：私もがんばりますからこれからもいっぱい子作りしてくださいね」（終）